



古熊譜

六百八十四

以古志成

立圃 終卷

大屋書房

TEL (291) 0062

東京, 神田, 神保町, 1, 1





911.32
I37

文部省
中村俊定
No. 72

合本

早稲田大学
文学部
国文学科

1058

何報

何報

満ちるは雲のまゝ天は月

連歌とてはなることばは

生ては世のまの道は

病もふくはるゝの世は

螢火は空を照らすは

花はさくらもせつと

釘もて葉袋はけと

玉乃重自とては

親信

正隣

虎利

有月

隣

信

大

利



くくく業の湯気空の雲より 信
金と云て服々の家祖母 隣
おあき子お籠いおせらるん 利
富う少事ねわの今乃能 利
あましくと精爽此屋分るもま 隣
結しき親乃心うこてー 信
いりあで刀のうを信守まじり 利
姿あやーじ新開乃音 利
まわるとるあまの心名をて 信
うやう海の中をみまね 隣
いりくもり害しと神行 利

まのいひうん新垣乃運 利
月夜と雲をねらるあはれ 隣
刀乃このうにわぬ人相 信
あましくと精爽此屋分るもま 隣
年よとたて懐妊を何 利
親乃目とあひわるとは是れ 信
遠く相馬と懐とらと家 隣
侍事ふおまけけり其持事 利
わくと魚あましうとて活河 利
魚網の縄をよりにおさうと 信
行ぬもあく勢とけふ也 隣

を根は國は海を其海が
其其下なるは天子利
浅くは神を神乃利を
いりてをともは川を
その神の地徳の乃利を
法の根則は胸の旁に
病の世は何もあらず
身は因果として勝を
迹をその富家の地を
在るのよき源なり
哲紙を月をわらわ
信 利 其 信 隣 利 其 信 隣 利 其 信 隣

うたつてはわらわら
業肉として根のよき
その業もあらず感
その心は神の心
為るは心志なり人
身をうたつては
其其は凡は人花の
あり神をとし業の
うたつては神の
門戸をわらわら
其 利 其 信 隣 利 其 信 隣 利 其 信 隣

品
三
風名にうたふおのらの入ぬは隣
おのれにまはれぬれうまの信
わらぬをのめてまをさつね婆か
月の夜伽にゆくゝおやも利
物乃まはれぬまをさつね利
露れ毒うひとうむおの魚隣
あふまあれたるまの利
兼海福もやまひらふんか
深草れ里のまをさつね隣
見るとあつたはけくまお信
あつたまをさつねおの信か

東風とたふれぬの西海の利
難波津のまをさつねおの信
都てうらうらまをさつね隣
世とまをさつねまの利
隠れもぬわらうまの信
うらまをさつねまの信
程ふまをさつねまの信
親らまをさつねまの信
羊とまをさつねまの信
おのれまをさつねまの信
まの神のつらまの信

わらふ此洞の面よあそ衣利
けり方るとうり人のわさ
漢より砂地の月より移り
教えふもろく^ふ政^ふわうふ秋
我と家^ふのあとの世も社^ふ給
余よりいふもろく^ふ政^ふわうふ
見とぬあつ瘧よを利と信
義よりともも移り^ふは不^ふ連
終言より此を^ふ利と信
わらふもろく^ふ政^ふわうふ
さふらと腹あつ^ふは利と信

飽食と移り^ふは利と信
乃ま^ふ此の^ふ利と信
傳馬とあつ^ふは利と信
持見とあつ^ふは利と信
先祖の^ふ利と信
月の輪^ふは利と信
と骨^ふは利と信
新^ふは利と信
中^ふは利と信
うら^ふは利と信
ま^ふは利と信

わくわくの毎時あきて
ふきかきさやあき神
舞礼の花やあはれま
まふ此仕目やまふ風
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ
まふまふまふまふ

何者

原をわらわ花のうきさ
風吹くあふ虎乃毛
朝家よのまき徳の箱も
わらわもさき川乃横波
わらわまきさきし橋の
お尻見るとは歌乃大
精云乃さる矢志やう
祿のさきうは身乃官

ねをけけのほきめしきよ
 づ錦けとらみらとらふ山
 用帳の戸や林あふとふふ
 聖愛に月ふそんくおろく
 けと女の子を懐びを懐引
 けとてふふふふふふふ
 書拾ふふふふふふふ
 けと編るふふふふふ
 國の海ふふふふふ
 氏乃果ぬの志けと乱を利
 わたしを貴重らふふふふ

わとあふふふふふ
 祢本は花ふふふふ
 ねふたふふふふふ
 けとて世の事と打はし
 風あふふふふふ
 大なるふふふふふ
 新報とふふふふ
 金うてもふふふふ
 心とらふふふふふ
 金銀ふふふふふ
 わとて世とふふふ

新金とるわらふと事あるは利
けりてはと可金あつては隣
縁新の月分は悦世の事は信
座祥のひと座の博思は
賣るると福や事と事ある
唯のかつきて事と事あるは利
あまも事と事と事あるは利
風やひと事と事あるは信
水旅誰の事も事と事あるは利
是と事と事と事と事あるは隣
福と事と事と事と事あるは信

人の事と事と事と事あるは利
新のや林と事と事と事あるは隣
事と事と事と事と事あるは利
是と事と事と事と事あるは利
縁新の月分は悦世の事は信
座祥のひと座の博思は
賣るると福や事と事ある
唯のかつきて事と事あるは利
あまも事と事と事あるは利
風やひと事と事あるは信
水旅誰の事も事と事あるは利
是と事と事と事と事あるは隣
福と事と事と事と事あるは信

糸編よき物もあはれ行生為 卍
 きくも花うらやの法乃世 信
 入乃の法をに深き目も 利
 とをたさされおとむり 隣
 盲目乃とせむ官心 信
 珍しき子乃切表とる 卍
 黙いじのまわらぬ 隣
 里の音とるれ子由待 利
 松茸はあまのまて 卍
 来む物者も枯よた 信
 夜越し月の影道よ 利

別ても中に氣くら 隣
 業ありは舟の物と 信
 道子の因果あり 卍
 叫ぶもやふ地獄の 隣
 熊野の縁起を 利
 是信ハ何れ南の 卍
 物とてとけぬ 信
 志の夫小は 利
 くらあめく 隣
 せられぬ 信
 料理と舌に 卍

定を以て病名の書加のり子
隣
枕屏風や風をとりて入
利
お花の白ひ床に寝るの意
か
又目の多り由ふ紅毒
死

[Faint mirrored bleed-through text from the reverse side]

竹餅

月夜に松燈の光人の雲海に
有太
若くは續ねとまに鶴將
有太
徳人の沙草はかき置固し
親信
あつきの舟に舟をさし
信
おらそよものまうさひおまを
か
お鼓の曲のあつね板下所
利
同敷風をりお藤集まきお
隣
おい汁を力に頼りて
信

けしきとせむれはと終り
 能くあけいふと乃女
 ちりき人へをわたり
 胸くくとりあさうさ
 是中をうろく月の解
 のりそふおるをんた
 ち城名やさ雄の四
 おふとをゆい後の
 網供の壇よあ物あ
 鎌叛れきりさふ
 侍の義をわさるい
 隣 信 利 利 隣 利 利 隣 利

ちんちんとおくとし
 月少くふ和光の
 露霜かをくさゆ
 妹乃る妹のあを
 野ををを考まの
 志のひてあは
 花よりと下約
 妻にやとわい
 侍のハ水け
 のれい
 隣 利 利 隣 利 利 隣 利 利

村とあるまき女の難とあるが
 古よりある久の家守人
 村の名を口へてあるとある
 とし寺の建を乃鐘
 一家の種神とあるを只ある
 ちりあふ庵のひけの筆
 出さる茶の湯の谷の付ゆて
 ありしと出さつふとく
 ありし寺の佛とあるを只ある
 實乃玉のよこふを朝利
 祇園とある月を只あるの鐘

實乃玉のよこふを朝利
 後着のちるま名とあるは
 馬の智を名とあるは
 二のうまをうふとあるは
 縁のまを名とあるは
 ありし寺の佛のたひとあるは
 行ありしとあるは
 家とあるは
 ち作し刀のちあるは
 縁ゆとあるは
 ちをたしとあるは

暮涼の若草をそく林の風 信
 花ぬをうらむとこあわふ大 隣
 年細くあまうく山乃主 非
 管れ言りたること枝木 利
 流水とらりて流るも星つぎ 隣
 まつう初乃を去る杜野 信
 榎原流はる秘密の流は子 利
 はまし文よのあゆめ子 非
 おまわくハ柳子ゆまよりれ 信
 けあけらねる身とらる 隣
 配膳は法種ありしををり 非

あつまふあみ非の大機屋 利
 志ゆ絶たれぬとくく之を 隣
 凡の被控いごころう少き 信
 なりつひ乃男とまをさけ名 利
 新紅ハ月小果ぬ山と夕 非
 西芳も塔へ全乃元とえて 信
 春よ大命とたとりし丹戸 隣
 蘇城まきつひ食我を喜め 非
 我の平園うらうとふ武士 利
 坂中から流せのる物のは 隣
 雲うくまをさそと祿山を 信

通ち湯壺のふれ彼色
利
種跡乃場ハ大生に
カ
きる書也花よひく
と遠業
利
声もあらうく
ひとの経
隣



湯何

善く外月も志事遠く
有カ
赤之志の書と書く
の園
親
時うふ庭の書と書く
有カ
出さぬのり
とら
と
松
女
高貴
城
今
海
と
方
の
備
仁
宗
興
せ
る
や
は
ら
く
物
を
カ
恒
と
ま
る
書
信
書
の
教
門
利
あり
ま
る
志
の
案
内
た
と
隣

幸いなる物事の利を以て
 自らおぼるるやうに白の海
 たるわが心のまんなかに
 つまそいふらばあじふは
 月より清く子細くは
 芥子一つに花をもちて
 葉のつらばは秋の草花
 自然に生るるやあやう
 情はけりて縁をひき
 みるく氏とてふまは
 梅のやうな花の物か

見ればあきくは蛇のま
 枕のやうな花の物か
 何れもあきくは蛇のま
 貴血と世のまはるる
 花見の神の歌とのま
 暖くあきくは蛇のま
 貴血と世のまはるる
 心はあきくは蛇のま
 友軍とならぬは
 かりあきくは蛇のま
 毒を入らぬは

わさふらに肌いりされし
 能くもむらと能くも
 白水も月をさそふ
 まららるる宿ふ
 書國へ流されし
 いく所全は之
 去れ来の嘆起し
 うのゆきうと
 後う孫の言
 世つさるる
 龍引と
 信 信 信 信 信 信 信 信

卦傳と
 高の
 唐の
 傳は
 寺は
 長と
 五の
 何の
 毛物
 言慢
 之を
 利 信 信 信 信 信 信 信

老の身は苦子も縁りて 信
 たりやむうと乳の人其果 亦
 全瘡の付業もあつた利
 下にさそひあつた借書の中 隣
 もれふ女は鼻の毛あり 亦
 寺はく島やうとあまな 仁
 能くもやうに河の縁に 隣
 ぬと海は難とあつた町 利
 月わると夜のふりては 仁
 と海は人家は多し井あり 亦
 是とあつたといふ田乃 利

多とこのうらぬ心運る 亦
 口ゆえあつたはにゆえ 利
 初極くこの雨作れり 隣
 業湯は難入ぬと林あり 亦
 病瘡とせむとあつた 仁
 ものひの葉あつた片是 隣
 うとゆとあつた乃の 利
 初極くはあつたは 仁
 病は乃氣とのつと 亦
 鷹つとあつたは 利
 下をあつたは 隣

子成と海と物と海と
よりと勝と事一人質に
よりと其意と物と物と隣
越のたよりと長崎の町と利

いふ所の物と海と物と海と
名と物と物と物と物と
思ふともやつと事と事と
式法とも物と物と物と物と
こもとも海と物と物と物と
城と物と物と物と物と

まゝと物と物と物と物と
我の事と物と物と物と
事と事と物と物と物と
たれと物と物と物と物と
よりと物と物と物と物と
事と物と物と物と物と
年月と物と物と物と物と
終りありと物と物と物と
あまんと物と物と物と物と
わらりと物と物と物と物と
よりと物と物と物と物と

人れりてなれとてそは西都
集統ありとよりくわいしき
わく又けしまれくとる家
のよりの年々くくあひ
町らひく一友進乃志すき
りて誰とてまこりて介
あは風流をまうし内くハ
定んぬとあくま終とれて
いりりいりくく乃沙後
きれてと能とてらまきり
すいあくまてしけ地志ハ

地名地とあまきふく
をとりいされるるわら
う付をてしり世とあひ
わさくしけまじ巴己巴
のちりくとるけりて流
れあるしに道わのちひら
書付けりあ

花や種類も同く空欄

立園

Handwritten text in a cursive script, likely a list or index of names or terms. The text is written in a fluid, connected style.

思ひ子

Handwritten text in a cursive script, continuing the list or index from the previous page. The text is written in a fluid, connected style.

うりらあやうふはまらうま
し是皆連字の如く
笑う及ふぬまあをたる人
はと破つて異風のこころを
こころあつたれ文字をわまう
ち約しをのゝ急ちをうまうり
流くとをうとふの如く
とけとあつた京田舎の屋
紙と信仰をうくとをうり
なまうるふ連字の如く
つとてとあつたふれつて
とて得て貴しと排格なる
の如く

り付は然とてまうる事
とてまはまはまはまはま
是とてとてとての排格なる
とてとてとてとてはまら
まらとてまらとて連字の付
つとてはまらとてはまら
つとてはまらとてはまら
連字とてまらとてまら
まらとてまらとてまら
先とて連字とてまらとて
細とてまらとて排格とて
付同とてはまらとてはまら
まらとてはまらとてはまら

とまじ功をたふらん行りくさ
 とふもあつあり時くのをやま
 判を字すもあひくさ世結と書
 とすらんは面をくさあしとさ
 ねと文字をたすなき族一ま
 人の身はくさ信恒情又八龍
 山の風系雲季物愛あつゆか
 事のものさ案と物あつあり
 真あつ事さるる今れをくさ
 由と織よゆくつ色おめ物
 世事さるるさるるくさ
 馬とい舟子のまゆとさるる
 ころころ一ま也句他つとさるる

こも他つ物くさまきくさ推せ
 あり物くさまきくさ一連さ
 のまきくさまきくさ一色たよ
 まきくさまきくさ一色たよ
 系の人まきくさまきくさ一色
 あつまきくさ一物まきくさ一
 とまきくさまきくさ一色たよ
 心物くさまきくさ一色たよ
 とまきくさまきくさ一色たよ
 もあつ物くさまきくさ一色たよ
 ありまきくさまきくさ一色たよ
 あつまきくさまきくさ一色たよ
 心物くさまきくさ一色たよ

一各別の物とたふふとおふ
舞し又たふふとせしめ
まゝまゝよふもも程とて
ていふふのあまをけし御神と人
乃句よそまじらあやまりもま
いふれと自句とま書る也つり
らあくどうくまふらふ

まふたの難波のみまけのま
元日や日中よあふ久らま
あるまやふ作のうらそん
遊鱒はあふおをまはつたのま

とつまにあひつらよ物よ日
せうりやよまつくともあふま

旦又

梅さふかたにそまにさふいあひ

春秋の旦又

名ハ刺瑠梅たりとも解お目小

あふめそよめとたためむお秋乃とふ

春秋四言

是あつじせ一

ま乃りあはふはもみよ右付の音

春の詩賦

旦又 同付句

はとひとあふお物とさひあ
みふ冬乃系池乃夕飯

漢和日入韵

是日春ヲ強ク白

幾回春潤色

振多草乃乃やまふかき
幸多と對して付る也

全

風ノ年入持扇

帳乃まりりふうわぬぬ乃

全

文月可申入

草花下うれ色なる由

全

光儀定始テ雪

字志乃神とふふなる由

付勺之神

奏るくそ花や梢乃多矣

君ははくふふ家妻の百鳥

是ハ瓜乃つらあそけとあ

らせとら所也

肥るるを瘠るるを掃カ

巖ハ山乃目う目木とを

子の力の言やとあふさ

お髪あわうう芳々と思ひぬ

我子ういふ家法かうりさ

そま回りの乃勢也

うはもろのりまひまふか
 鉄炮はし并れ終ると同様に
 本に竹と終てらにはせらるに
 天神とよき世よあふれ
 第一の國をさるはんこにて
 かせらる天神と七代め
 うとりあそりこれ親類
 此中あそり主婦の縁む
 さいらゆちる人
 他人と他人中いふらん
 清のあ縁よ主婦乃らそ

け付やうむゆりやわさま
 うーあそあひまらめ
 をき親類の中あそりま
 婦と成らんより他人
 乃縁はふさこむうある
 けらうらあはらあそらさ
 志めらる古剛の敷とああ
 是らあ玉れそりあは城の
 せりあ縁のまそらうら
 色時代よかりあそらあ
 さいけあそらあ

厚の種よるること書

付る也

只ふれ其の事なる事一ニ
色とく事なる事なりある
事なる事なる事なる事
あり事なる事なる事なる
あり事なる事なる事なる
事なる事なる事なる事
事なる事なる事なる事
事なる事なる事なる事
事なる事なる事なる事

物事と事なる事なる事



古今圖書集成
博物彙編
藝術典
第一百八十二卷